

房 総 一 周

鉄 道 唱 歌 詞

(汽笛一声新橋の曲で歌う)

作者は明治の中期頃津々浦々にまで流行した大和田健司氏作鉄道唱歌「汽笛一声新橋を」の唱歌に人一倍の憧れを持つて居つた。

爾來因鉄就職後も退職する迄、千葉県を一周する鉄道唱歌があればよいなあと思つた事が度々あつた。

千葉県も東京の近接地域として素晴らしい発展を遂げ、昔の鉄道沿線名所なども漸次薄れて跡形も無くなつた所もある。

一昨年鉄道九十周年記念日に思い立ち、この激しい変り方の中に千葉県の鉄道網に沿つて昔を想い出しつつ作詞で案内が出来たらと思ひ、不敏を省ず羅列したもので、独り楽しんで居つたものを公表した次第で勿論識者の叱正を仰ぎ尚ほ良いものに改め愛されるものにしたいと念願する次第である。

昭和四十年十月十四日

作者 鵜 沢 六 治

目次

第一編

総武本線 お茶ノ水―小岩間……………4

市川―船橋間……………5

津田沼―千葉間……………6

房総東線 千葉―蘇我間……………6

第二編

房総西線 浜野―青堀間……………7

大貫―保田間……………7

安房勝山―館山間及自動車線……………8

九重―安房鴨川間……………9

房総東線 安房鴨川―鵜原間……………9

勝浦―長者町間……………10

大東―大網間……………10

東金線大網―蘇我間……………11

第三編

総武本線 四街道―成東間……………12

松尾―飯岡間……………13

猿田―銚子間……………13

成田線 椎柴―小見川間……………13

（佐松線）水郷―久住間……………14

（成田、我孫子、佐倉間）及常盤線……………14

第一編

総武本線

お茶ノ水 小岩間

- 一 ドア一締りて走り出す
電車は神田のお茶の水
離れて東に向ふなり
窓より見渡す大東京
- 二 起点を出でて秋葉原
立体交叉の高架線
朝夕ラッシュの乗換は
水の渦巻如くなり
- 三 残る情緒は江戸の香を
浅草橋の周辺は
軒を並ぶる問屋街
三味の音聞こゆる柳橋
- 四 駅を過ぐれば隅田川
夏は花火に屋形船
大川端にただづむは
やぐら太鼓の国技館
- 五 越して迎ふる両国と
昔の本所錦糸町
その間およそ一哩
日露の風雲急なりし
- 六 明治三十七年に
開通したる本邦の
市街高架のこう矢なり
過ぐる時代のその速さ
- 七 焼野となりし大正の
震災昔の物語
香華の煙絶へ間なき
慰霊の堂はこの左
- 八 過ぐれば繁華の錦糸町
江東地帯の楽天地
越して隣るは亀戸駅
東武社線に乗換へて
- 九 北千住より日光や
常盤線に連絡す
江戸の昔の天満宮
訪ふ人多き都人
- 十 老いても薫ると言はれたる
今名の残る臥竜梅
水に映れる藤の花
その音も高き太鼓橋
- 一一 去所の名所は彼所ぞと
言ふ間もあらず次々に
平井過ぐれば荒川は
水の護りの放水路
- 一二 新らたに開けし新小岩
金町線の分岐点
総武と結ぶ常盤の
車両を仕訳くる操車場
- 一三 小岩の駅に程近く
星下がり松の善養寺
間もなく過ぎて江戸川は
東都と千葉を境する

総武本線

市川 船橋間

二〇 雲にそびゆる鉄塔は

船橋無線電信局

南に名さつ妙行寺

西船橋より程近し

二一 次に迎ふる船橋は

東武社線に連絡し

柏を越へて醬油の

キツコーマンの野田市へと

二二 栄へを海に張り出す

マンモスヘルスセンターは

わき出るガスを利用する

大温泉の浴場と

二三 娯楽演芸スポーツまで

大衆的の憩い場所

京成電車の道すがら

谷津遊園も面白し

二四 過ぎて新らたな習志野市

昔は陸軍練兵場

駒のひずめも音高く

門出の勇氣勝りけり

二五 原は近代団地化し

八千代 大久保 薬園台

高根台等整へる

勤勞人のネクラ成す

一四 江戸川堤をながめつつ

渡れば市川国府台

武蔵平野を一望に

緑の丘に囲まるる

一五 自然の利を得し城廓は

昔里見の跡とかや

産の神とまつられし

手児奈のほこらは真間の里

一六 鉄路に遠く浜伝い

鴨に名を知る新浜や

浦安猫実行徳と

なじみ少き汽車の縁

一七 天明の頃水戸黄門

葛飾八幡参詣に

ここに来りて迷ひしと

伝はる迷路の代表の

一八 竹の林の八幡藪

刻む碑文に趾を止む

古人の伝え今消えて

大市川の中心街

一九 本八幡駅過ぎ行けば

続く中山法華経寺

五重の塔に連りて

租師の御堂に鬼子母神

総武本線

三二

誰が脱ぎ掛けし羽衣の

津田沼 千葉間及び

松も昔のしのばれて

房総東線 千葉蘇我間

歌詠む人を泣かすらん

二六 津田沼過ぐれば東の間に

三三

千葉は泉衛の在る所

古き陣屋の幕張に

房総総武の岐れ路

甘藷の神とまつりたる

房総線に乗換へて

青木昆陽の社あり

西より東に向はんか

二七 左に入りて長作の

三四

次の本千葉過ぎ行けば

世に珍らしき夫婦梅

右は近代千葉港

右の海辺を見渡せば

連なる多くの棟々は

袖ヶ浦廻の真帆片帆

これぞ川鉄工場群

二八 新検見川の右方に

三五

左は千葉氏の旧趾にて

並び立ちたる鉄塔は

その名も高き亥の鼻台

大洋隔つる交信の

名医を国のここかしこ

沿線第二の無電局

出だせし学の庭とする

二九 稲毛の海の遠浅は

三六

杏葉りよの章名しるしを經たる

昔賑ふ汐干狩

医科大学は丘の上

内湾埋立進捗し

遙かに海を見渡せば

今は市民のオアシスに

港に出入る大型船

三〇 西千葉越ゆればその先に

三七

遠くに望む富士の嶺は

偉容を誇る民象駅

今も昔も変りなし

駅の東の千葉公園

蘇我は東西分岐点

大賀博士が移植せし

右に岐れて西線へ

三一 綿打池の蓮の花

二千余年の年月を

地中に埋れ朽ちづして

見事に開く生命力

第二編

房総西線

浜野 青堀間

三八 浜野の駅の右方に

海に臨んで立ち並ぶ

コンクリートの煙突は

東電火力発電所

三九 両総境の村田川

小さき流れを打渡り

八幡宿には八幡宮

関東三社の飯ヶ岡

四〇 左に離れて森の中

臨海産業裏付ける

勤労人の施設ある

辰巳団地はここにあり

四一 五井より社線に入りて見ん

養老けい谷小湊線

斜めに走る房総は

春よし 夏よし 秋もまた

四二 花と緑の鶴舞や

あゆつり、キャンブ紅葉と

名残りを惜しみ戻り来て

養老川を打渡り

四三 次に迎ふる姉ヶ崎

越して隣りの長浦も

内湾埋立て進捗し

昔の才立は今いづこ

四四 楢葉を過ぎて小櫃川

渡りて殿根過ぎ行けば

はす田の中を進みつつ

早や木更津に着きにけり

四五 久留里線の分岐点

昔城下の久留里より

亀山に出でて天津へと

手頃のハイクコースあり

四六 イツゾヤ上総の木更津と

歌舞伎に知らるる玄治屋

狸ばやしの証城寺

金鈴塚など名所あり

四七 君津青堀過ぎ行けば

右は昔の要塞の

ペールを脱ぎし関東の

天の橋立富津の洲

房総西線

大貫 保田間

四八 間もなく汽車は大貫へ

近くに建ちたる観世音

東京湾口へいげいし

諸人護る如くなり

四九 佐貫に出づれば左り側

房総一の鹿野山

九十九谷や十洲を

一目に望む景色あり

五〇 右の海辺に出づぬれば

房総西線

海を隔てて向い側

安房勝山 館山間

指呼の間に眺望し

遠くは伊豆や富士箱根

及自動車線

五一 風光明眉絶佳にて

五七 安房の勝山長閑にて

新舞子浜の愛称を

草喰む牛もなれなれし

鬼泪きただの裾を辿りつつ

岩井の左富山は

出でては又入るトンネルを

昔里見の八犬伝

五二 抜けて出づれば湊町

五八 伏せ姫ここに隠れしか

左に入りて高宕山

問ふ間もあらず富浦へ

野狼の戯る愛らしさ

初夏を告ぐるびわの味

渡るも早し湊川

走りてにぎわす食膳を

五三 越して迎ふる竹岡は

五九 那古船形は隣り合い

遠く明治の昔より

右は船形 那古左

内湾汽船の扱所

海に面し山を負ひ

過ぐれば次の浜金谷

涯を削りて中腹に

五四 安房と上総を堺して

六〇 互に観音鎮座ます

屏風のやうに登そびへ立つ

崖観音の名はここに

鋸山の厳めしさ

船形港は漁港にて

鍾に午睡の夢破る

漁いさり船呼ぶ避難港

五五 五百羅漢の日本寺にほんでら

六一 前を流るる平群川ひぐり

ロープウェイで昇り降り

越して迎ふる館山は

対岸三浦半島に

鏡ヶ浦の静波に

フェリボートの便もあり

面する南房中心地

五六 トンネル抜けて迎ふるは

六二 ここよりバスに乗り換へて

海水浴に知られたる

右に向へば洲の崎へ

保田は水澄み波静か

行く道すがら西岬

都塵を洗ふ心地よさ

国民宿舎の鳩山荘

六三 左に折れて安房神社

六八 南傾斜の山々に

ここにもうでて白浜へ

冬花盛りはここかしこ

海女の人呼ぶ野島崎

太海に近き波太島

半島南最先端

仁右衛門島の別名を

六四 ここにたたずむ灯台は

六九 鎌倉時代頼朝の

岩かむ怒濤を見下ろして

秘める伝説ありと聞く

椿の大島目の前に

附近に小島点在し

照らすや闇の波の上

さながら東北陸前の

六五 房洲よいとこ南を受けて

七〇 松島湾によく似たり

冬も菜種の花が咲く

安房松島の名はここに

房洲音頭を口ずさみ

嶺岡山を潜り抜け

館山駅に戻り来て

長狭平野に出でぬれば

七一 東西線の終点の

房総西線

安房鴨川に到着す

ここより先は東線と

九重 安房鴨川間

線路のその名変るなり

房総東線

七二 鴨川離れて浜伝ひ

松風清く右に受け

安房鴨川 鵜原間

左に安房の鏡忍寺

日蓮修行の史跡あり

六六 急ぎ汽車に乗換へて

七三 天津に汽車を降り立てば

九重過ぎて千倉駅

ここより登る清澄山

南房屈指の漁港にて

老杉巨木亭々と

近海漁船の扱ひ所

周囲は筒森山林の

六七 千歳を過ぎて南三原

七四 東大農学演習林

和田浦江見の海面は

ここより山の背を伝ひ

遠くに躍る黒潮と

亀山に出でて久留里線

近くは奇巖顔を出し

ハイクに適するコースあり

七五 山より降りて汽車に乗り

八一 海女に知らるる御宿は

隣るは小湊誕生寺

岩和田岬のその上に

宗祖日蓮生れしか

日墨西の交通を

すい林背に負ふ巨刹なり

碑文に刻む塔立てり

七六 大亀のすむ水族館

八二 浪花過ぎて大原は

遊覧船にて妙の浦

木原線の分岐点

魚族の世界を見るもよし

古き城下の大多喜と

窓よりチラリと断がい美

中野に結ぶ小湊線

七七 おせんころがし右に見て

八三 鉦泉各所にわき出でて

安房と上総の国境

四季行楽の場所多し

大風沢のトンネルを

半島斜めに養老の

出づれば興津鵜原へと

川を伝いて五井に出る

房総東線

勝浦 長者町間

八四 木原線を戻り来て

もと来し道の大原へ

八幡岬に岩船港

日在の浜の地引き網

七八 理想郷を後にして

八五 三門を過ぎて長者町

続くその先き勝浦港

太東岬を遠望し

東岸屈指の漁港にて

江波土に注ぐ夷隅川

魚の水揚げ豊かなり

訪ぬるつり人いと多し

七九 小高き丘に囲まれて

三ヶ月形の湾を成し

砂浜広く波静か

房総東線

太東 大網間

海水浴にバンガロー

八〇 名高き灯台測候所

八六 越へて太東過ぎ行けば

野猿群がる猿ヶ城

東浪見の駅の東かた

天然記念の乳いちよう

太平洋の砂浜に

八幡岬に遠見岬

尽くることなき砂鉄鉦

八七 駅の前側森の上

数々登る石段は

九四 新茂原駅後にして

本納出づれば左り方

昔いくさの祭神の

軍だ利明王鎮座せり

いちよりのもりのこずえより

間もなく上総一の宮

青松敷せたる砂浜を

九五 橘姫をまつるとの

神社を窓より遙拝し

はるか東に展望し

冬暖かく夏涼し

永田を過ぎて大網へ

東金線の分岐点

八九 神武天皇母君の

玉依姫をまつるとの

房総東線

東金線及

大網 蘇我間

城山上には観命寺

一の宮川打渡り

九六 ここは交通要衝路

白里行のバスの便

八積までは浜近く

九十九里の砂浜に

法華に名高き本国寺

みやざく宮谷もちを購ひて

網引く掛声勇ましき

漁師の気合いは面白し

九七 入りて見よやの東金の

花の名所八鶴湖

天然ガスに名を得たる

茂原は近代工業に

九十九里浜片貝に

鉄道に代わるバスの便

また農、商や観光も

その奥行きは深くして

九八 八坂神社の松之郷

伝説秘める雄蛇ヶ池

ここより入りてかさ森へ

坂東三十一番の

東金過ぎて求名より

成東に到りて総武線

札所重要文化財

珍奇の構造見るもよし

九九 元来し道を引き返し

ここより汽車は向きをかへ

訪ぬる所はまだあれど

汽車の旅路は急がわし

坂道登り一筋に

房総の背を横断し

一〇〇 土気と菅田もつかの間に

過ぎて右方林中

高き煙突白やかた

国立下総療養所

一〇一 鎌取過ぐれば程もなく

耕地を隔てて森の中

こずえに顔出す山門は

知らるる鶉の森大巖寺

一〇二 鶉族の社会のネグラ成し

森のこずえを白くして

天然記念の指定あり

蘇我より入りて元の千葉

一〇五 昔ひびきしラツバの音

時代の歩みは目まぐるし

ここは堀田の城下町

今は城跡に厚生園

一〇六 左の丘をながむれば

将門山の古城趾に

夕空映えて風寒し

ここより銚子へ向はんか

一〇七 南酒々井や八街は

房総半島中央部

大陸風土に似通ひて

木枯吹くや霜白し

一〇八 日向の南薬王寺

布田の目薬名も高し

成東駅はジャンクシヨン

総武房総結ぶなり

一〇九 浪切不動や鉱泉は

近郷近在知られたり

東金線の東方

海水浴に浜伝ひ

一一〇 片貝、鳴浜、はす沼と

太平洋の砂浜に

気軽に素朴で楽しめる

未だ知れざる場所多し

第三編

総武本線

四街道 成東間

一〇三 総武本線乗換へて

次に隣るは四街道

昔野砲の旅団あり

砲声ひびく時ありし

一〇四 六方野原も程近く

自衛隊も駐とんす

物井を過ぎて佐倉駅

成田線の分岐点

総武本線

松尾 飯岡間

一一 松尾の駅の北の方

芝山町の観音寺

三尊仏の宝物は

仁王と共に名も高し

一一二 巨匠の遺す彫刻と

巨勢こせかね金岡かねおかの筆の跡

太古の遺跡堀返す

ハニワの館もここにあり

一一三 隣る横芝西北に

八田の金比羅鎮座ます

栗山川を打ち渡り

多古や佐原や三里塚

一一四 国鉄バスの要なす

八日市場もはや過ぎて

八万石の干潟ひかたも面に

繁るは甘しよ落花生

一一五 次に迎ふる旭駅

矢指ヶ浦に程近く

九十九里浜最北端

産額秀づる食料品

一一六 飯岡岬と太東の

その間およそ十六里

六町一里の支那制に

ならいて呼ぶか九十九里

一一七 ここより南太東まで

白波寄せる砂浜は

弓の如くに延々と

ゆるむことなき弦の如

総武本線

猿田 銚子間及

成田線

椎柴 小見川間

一一八 猿田過ぐれば松岸は

流れ流れて大利根の

坂東太郎の船着け場

ここにかかりし大橋は

一一九 千葉と茨城カスガイに

大利根跨ぐ関東一

銚子に來りて調子づき

遊覧バスに乗りかえて

一二〇 奇岩群がる海鹿島あしか

名洗、犬若ながめつつ

犬吠崎の灯台と

地球の丸く見える丘

一二一 遠く西のヨーロッパ

英仏海峡イギリスの

ドウバによく似た屏風浦

よくも出来たる国の端

一二二 ヤマサ、ヒゲタのしよ油は 一二八 船にて浦に出でて見ん

国の内ち外に愛あでられつ ポプラのこずえも延々と

その産額も豊かにて 鯉に名高き十六の

外貨をかせぐチャンピオン 島々ながむる景色あり

一二三 土産を求めて佐松線 一二九 昔蘇峰が名付けしと

利根の流れをさか上る 霞ヶ浦を含めたる

椎柴、豊里、橋と 周囲およそ四十里

川行く蒸汽の道すから 日本に冠たる大水郷

一二四 この地に來りて想ひ出す 一三〇 潮来出島の真菰中

昔天保の水滸伝 アヤメ咲くとはしおらしや

尋ねる間もなく次々に 情緒に富める民謡に

笹川小見川つかの間に 名残を惜しみ戻り来て

一三一 乗つ込みふなのつり名所

成田線（佐松線） 大戸、神崎早場米

利根を境に茨城と

地の利を得たる米所

水郷 久住間

一二五 水郷、香取後にして 一三二 小御門神社を遙拜し

早や佐原へと着きにけり 廻ぐる車は滑河に

ここは水郷中心地 文化財の竜生院

香取、鹿島や潮来へと 久住を過ぎて成田駅

一二六 香取の社は富津主の 成田線（成田、我孫子

命をまつるところにて 佐倉間）及常磐線

タケミカツチの命みことをば

鹿島の社にまつるなり

一二七 佐原ばやしは関東の 一三三 成田は我孫子の分岐点

三大祭の一つなり 印旛の沼の北に沿い

科学技術の先覚者 松崎、安食あじか過ぎ行きて

伊能忠敬のあと尋ね 想い出づるや川料理

一三四 筑波おろしを北に受け

一四一 越ゆれば次の北松戸

しよつげん
将監川を打ち渡り

新らたに興こる榎音は

利根の流れを県境

帝都に近き便もあり

小林駅を後にして

地勢の展びる日覚しさ

一三五 木下、布佐の周辺は

一四二 松戸は交通要衝路

手賀沼開発進歩し

新京成に乗換えて

釣りや行楽場所多し

津田沼に出づるコースあり

湖北過ぐれば常磐線

六実ゴルフや八柱の

一三六 我孫子に連なる沿線と

一四三 盤園詣での便もあり

東葛地方の北西部

尋ねる所は多くして

靈験高き弁財天

名残り尽くるを知らざれど

富勢の札所に詣でつつ

元来し道に引き返し

一三七 許す時間に訪ね見ん

一四四 開運繁昌の護り神

柏に出づれば船橋と

あつむる信徒を全国に

埼玉県の大宮を

本尊不動に詣でして

結ぶ東武の社線あり

大護摩修業するもよし

一三八 南柏と北小金

一四五 裏山伝いの公園は

越せば次の馬橋駅

滝あり池あり梅林も

流山線乗換えて

ここより国鉄バスに乗り

味淋に名高き流山

花の名所の三里塚

一三九 江戸川境に埼玉と

一四六 見渡す限りの草原に

利根を境に茨城と

牛馬の放牧見るもよし

楔のやうに入り込んだ

バスにて成田へ引き返し

関宿町など宿場あり

京成電車の道すぐに

一四〇 清水公園花名所

一四七 義民の誉れ隠れなき

調味を世界に名を馳せる

宗吾靈堂参拝し

野田醤油も程近し

印旛沼を後に見て

元来し馬橋へ引き返し

酒々井に出でて佐倉へと

一四八 元来し道にたどり着き

いつしか西より南へと

東を廻り北に入り

これにて房総一周す

一四九 思へば夢か東の間に

人に翼は無けれども

乗つて廻りし汽車の便

無名の筆者は感じけり